
心バード

ディスエグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心バラード

【Nコード】

N0920I

【作者名】

デイスエグ

【あらすじ】

ある日、初めて会った女の子と喧嘩した。次の日、その女の子は転校生としてやってきた。そのあと女の子は家の隣に引っ越して来た。平凡な高校生活に、次々と起こる困難。それらは、芹沢空の人生を大きく変えていく。様々な高校生の青春を描いた恋愛物語。

第一話：転校生がやってきた。

2008年夏

僕はどこにでもいるような普通の高校生だ。

毎日ダラダラ高校生活を過ごし、気がついたら1年が過ぎていた。
僕は今高校2年…

このまま何もないうまま高校が終わるのかなあ…

運命の出会いとか…

あつたらいいなあ…！！

ジリリリリリッ…！！

「うわっ…！！」

大きな目覚ましの音で目が覚める。

「妄想混じりの変な夢だったなあ…」

俺の名前は芹沢空。
セリザワソラ
ユウナギ

夕風高校に通う 17歳。

バスケット部に所属する普通の男。

特別モテた記憶もなく、人並みの人生を送ってる。

「空、ご飯覚めるよー」
いつもの母の声。

「髪セットしてから行く!!」
空は軽く髪をセットし、居間に向かった。

朝食を食べ学校に向かった。

キンコーンカーンコーン
「セーフ!!」

余裕こいてゆっくり歩いてたら遅れるところだった。
空はぐてつと机に倒れ込む。

「珍しく遅かったな？」

男が一人空の前の席に座る。
こいつは中村響。
ナカムラヒビキ

空の親友でバスケのライバル。
ちなみに美月というカワイイ彼女がいる勝ち組。

「おう響…余裕っていいことないな!!」
「さあな…」

それより夕凧高校にある噂が流れてるぞ。
「どんな噂…？」

空が聞くと、響は小声で言った。

「なんでも二日後に、転校生が来るらしい。しかも超カワイイ女の子らしいぞ。」

響はワクワクしながら話している。

「そんなワクワクしてたら美月に殺されるぞ…」

空は軽く響に注意した。

それを聞いて響は普通に言った。

「転校生が来るんだから、ワクワクして当然だろ？」

「…まあ、そうだな…」

転校生が来るのか。

どんな子かなあ…

俺もワクワクしてきた。

その時はまだ、どんな子分からず、空は期待に胸を膨らませるのだった。

キンコーンカーンコーン

授業が終わり放課後…

珍しく部活が休みだったので、空は一人寄り道をして帰ることにした。

コンビニでアイスを買った。余りに暑かったので二つも買ってしまふ。

「夕風公園でも行って、のんびり食べよっかな…」

学校の裏にある夕風公園は夕風の町を一望できるスポットである。

「ふう…、疲れた。」

公園に着いたが誰もいない。
夕方だから仕方ないだろう。
子供達はお家に帰る時間だ。

空はベンチに座ってアイスを食べて涼んでいた。

シャリッ…

「やっぱシャーベット最高!!」

一人で盛り上がってる時、公園の丘の方に人影が見えた。

誰かいるのかな？

疑問に思った空は丘の方に歩いて行った。

夕日に照らされた夕風町、その美しい景色を悲しそうに見つめる女性
性の姿がそこにあった。

悲しそうな彼女の横顔、しかしその横顔はどこか神秘的で…、どこ
か魅力的で…。

空はしばらくその姿に見とれてしまった。

すると、彼女の目からキラリと涙がこぼれ落ちた。

もしかして…泣いてるのか？

心配になった空は、思い切って声をかけることにした。

「あの……どうかしたの？」

彼女から返事はない。

「ねえ…大丈夫？」
やはり返事はない。

ピトッ！！

空はその子の頬に持っていたアイスを付けた。

「っ…！？冷たい！！」

彼女はこつちを振り向いた。

目に涙を溜めていて、悲しそうな顔をしている。

「な、なにすんの！？」

彼女は涙を拭いて、空の顔を見る。

「あつごめん…」

何回呼んでも返事がなかったから…」

「考え事していたの。」

それなのに、いきなりアイスを頬につけるなんて考えられないわね
！！」

邪魔されたのがそんなに嫌だったのか、彼女の言い方には怒りが込められていた。

「でも、返事しなかったのはそっちだし、一方的に俺が悪いわけじゃないと思うけど…」

言い訳すると、彼女は空を少し睨んだ。

いや、睨んだように見えた。

「たとえそうだとしても、見ず知らずの一人の女性に軽々しく話しかけるなんて少し図々しい……!!」

「違うって……!!」

君が悲しい顔で泣いてたから、なんかほっとけなくて……」

「へえ……」。

私が泣いていたことまで知っていながら、

そっとしておこうという、優しい心のゆとりはなかったのね……

もしかして、そんな弱ったカワイイ女性を狙う新手のストーカー……?
」

(自分でカワイイと言ったぞ……!!)

空の心の声

「なんで俺がストーカー何だよ……!!」

17歳でストーカーなんて、そんな根暗な奴に見えるか?」

「見える……!!」

(見えてるんだ……。)

もう一度言つとくが空の心の声

「とにかく俺はストーカーじゃない。

もう話しかけないからそれだけはわかってくれ。」

「…わかったわよ。」

もう話しかけないでね!!」

彼女も渋々納得してくれたようだ。

「はいはい、じゃサヨナラ…」

空は帰ろうと後ろを向く。

「あっ…!!」

ちよつと待つて。」

彼女が呼び止める。

(話しかけるなと言っておきながら、自分から話しかけてきた!!)

「どうかした?」

「叫んだら暑くなってきたから、そのアイスちょうだい。」

(あれだけ問題になったアイスをここで欲しがるか!!)

「わかった、やるよ。」

はい、どーぞ。」

空はアイスを渡して立ち去る。

「ありがと!! ストーカーさん。」

（誤解は解けていなかった！？）

空はくたくたで家に帰って来た。

今日はマジで疲れた…

悲しそうかと思ったら、想像を超える元気さだった。
正直もう会いたくない。

でも、あの涙は……。

翌日…

キンコンカンコン

「ふう…今日は余裕で間に合った。」
空は席に座る。

「よう空…

ビックニュースだ!!」

響が大声で言った。

「なんと、転校生が今日来るらしい。先輩の話だともものすごくカワイイらしいぞ。」

ショートカットの明るい感じの子らしい。」

響の発言を聞いた瞬間、空はすごい嫌な予感がした。

「ショートカット…」

「何だ？やっぱり興味あんのか？」
響がニヤつく。

「少し今は、ショートカット恐怖症なんだ…!!」

「なんだそれ？」

響は？マークが出ている。

ガラッ!!

先生が入って来た。

実に男らしい我らの担任。

「まずおはよう!!」

んで、今日は転校生がいる。

うちのクラスになったから仲良くしろよ!!」

うちのクラスの発言に、クラスが湧く。

「んじゃ本人に自己紹介してもらいましょう？
よし、入っていいぞ。」

ガラッ！！

入って来た女の子は、間違いなく昨日の彼女だった。

彼女と目が合った瞬間、二人は

「あゝ！！」と指を差し合った。

「わがママ女！？」

「ストーリーカー男！？」

嫌な予感が的中した瞬間だった。

「何だ？おまえら知り合いか？」

担任が不思議そうに尋ねる。

「知りませんこんな奴」

「知りませんこんな人」

二人は声を揃えて言う。

「そ、そうか…」

「じゃまず自己紹介だ。」

彼女が前に立った。

「二見かえで（フタミカエデ）です。よろしくお願いします。」
彼女は頭を下げる。

パチパチパチ…

クラスから拍手が聞こえる。

なんとなく、男子の拍手が多い。

空は拍手をしなかった。

「じゃ休み時間にもいろいろ聞いてくれ。」
担任が言った。

「んで、二見の席は…空の隣!!」

「ええっ!!」

空は驚きのあまり立ち上がった。

その様子を見て、自分の席が昨日の男の隣だと悟った二見もびっくりする。

「あの…先生、私も嫌です。」
二見が言った。

「“も”ってなんだよ！
俺まだ何も言ってるぞ。」
空がツツコミを入れた。

「なんか仲悪いから強制的に隣にする。
仲良く…な!!」

担任がにやつと笑う。

（ドS発動した。）

渋々二見は空の隣に座る。

「よろしく、ストーカーさん。」

（性格悪すぎ…）

休み時間、女子や数名の男子に囲まれる二見。

それとは別の場所で、空も男子に囲まれていた。

「なんでおまえ、彼女と知り合いなんだ！！
しかも席も隣だしよ…」

「俺は全然うれしくない…」

「そんなのどうでもいい。あんなにカワイイし、明るい、はっきりに
いって彼女はパーフェクトなんだ。
すでに先輩も動いてるそうだ。

あんまり仲良い姿見せると…死ぬぞ！！」

（心配してんの？脅迫してんの？）

「とにかく、俺らが言いたいことは…。」

空はゴクリと息をのむ。

「羨ましいってことだ。」

（それだけ…！？）

馬鹿どもと話を終えて、
特に仲が良くなることもなく、授業は終わった。

「あーやつと終わった。

今日は特別長かった…」

空は疲れた様子でかばんに教科書を入れる。

二見はさつさとどっかに行ってしまった。

まあ関係ないけど…

「空、部活行くぞ…！」

響が呼ぶ。

「今行く。」

部活も終わり、一人家に帰る。

「ただいまー」

靴を脱いで居間を通ると母さんが呼び止めた。

「ちょっと隣の家で父さん呼びに行ってきた。」

「なんで隣の家？」

「父さんの昔からの親友が隣の家に戻ってきたから、手伝ってんの！！」

早くいつてらっしゃい。」

再び靴を履いて玄関を出る。

ピンポン！！

隣の家のベルを鳴らす。

「はい。」

誰かが走ってくる音が聞こえる。

なんか嫌な予感…

ガチャ！！

中から出てきたのは二見かえでだった。

「ええっ！！？」

二人は驚きのあまり一歩後退する。

「なんでおまえがいるんだよ！！」

「それこっちのセリフだし…
なんでここにいて、私の家に来んのよ!？」

「隣…俺ん家。」
実に残念そうに、空は言った。

「もしかして、今家にいるお父さんの親友って…」

「俺の父さん…」

「……………はあ…」
呆れるあまり二見はため息をついた。

その気持ちは痛いほどわかる。
親友なのだから、度々家族ぐるみで会っただろう。
ならば当然、こいつとも会っただろうから。

「マジ最悪…
もう家に来ないでよ。」

(父さんに言ってくれ…)
「言っとくけど、私あんたのこと大っ嫌いだから…」
「知ってる…」

「じゃあ伝えとくから後帰っていいよ。
ってか帰って!!」

(ひどい嫌われようだ…)

ガチャ!!

勝手にドアを閉められた。

「はぁ…」

このこと、クラスの奴らに言ったらホントに死ぬかもしれないな…

空は肩を落として帰った。

これが俺の生活が変わり始めた最初の日だった。

これからどうなってしまっただろう…

そんな先のことを心配する前に、明日生きていられるのか不安に感じた空だった。

第二話：事件発生！！！！

ジリリリリリ！！！！

「んんっ！！」

6時半、隣の家のでっかい目覚ましの音で空が起きる。

「向こうの部屋か……」

自分の部屋の窓を開けるとすぐのところにあるその部屋から、音は聞こえて来た。

ジリリリリリ！！

音は絶えず鳴っている。

こんだけ鳴ってんのに起きないのかよ！！

コンコン！！

窓を叩く。

「あの……目覚まし止めてもらっていいですか？」

返事はない。

寝てんのか？

「あの……失礼します。」

隣の窓を開ける。

ドキッ！！

その部屋は二見かえでの部屋だった。

二見の寝顔は、今までのイメージをぶち壊すほどかわいい顔をしていた。

「黙って寝てる時はかわいい顔なのに、起きるとあれだもんな…」

ジリリリリリ！…！

目覚まし止めないと…

空は時計に手を伸ばす。

パチッ！！

目覚ましを止めた瞬間、二見が目を覚ました。

……。

目が合ったまま、二人とも固まっている。

（この状況は…まずい。）

「きゃあ——！！！」

「違う…誤解だ！！！」

「来ないで変態！！」

寝込みを襲うなんて最低！！！！」

「目覚まし止めたただだって……！！！！」

「止めて！！いや！！！！」

二見が枕を振り回す。

「うわっ……あぶね！！！！」

ここ二階だって……

落ちたら怪我する……」

バシッ！！

枕が顔面にヒットする。

「がっ！！！！」

手が離れる。

全てがスローモーションで見えた。

ガラララ……ガッシャーン！！！！

勢いよく物置小屋に落下。

「なんだ！！雷か！！！！」

「今のすごい音は何？！！」

家族が一斉に起き出す。

この日1番の目覚まし音が鳴った瞬間だった。

「いてっ！！もつと丁寧に……」

家族に消毒液を塗ってもらっている。

幸い、当たり所はよく、打撲と切り傷だけで済んだ。

二見の父さんと俺の父さんが謝り合っている。

二見は……？

知らん顔している。

でも、時折こつちを見ているので心配はしてくれてる……………はず！！

俺はこの出来事を一生忘れないだろう。

キンコーンカーンコーン

ざわざわ……

クラスはざわついている。

俺の頭の包帯とあちこちに貼った絆創膏が原因のようだ。

「空……その怪我どうした？」

響が心配してやってきた。

ビクッ！！

二見が反応したのがわかった。

「突き落とされた。」

「はっ！？」

響はまたしても？マークをつける。

「二階から突き落とされたんだ。」

「違うでしょ！！」

二見が会話に入ってきた。

「あんたが私の寝込みを襲おうとするから。」

私は正当防衛よ…」

「寝込みを襲った？」

響が一言。

「だからあれはおまえのうるさい目覚ましを止めたただけだったの！！」

「目覚ましって、一緒に寝たのか！？」

響が一言。

「だったら私に言えば良いじゃない。目覚まし止めてって。」

「二人で寝たのか？」

響が一言。

「おまえ起きなかったじゃん。」

「一緒に寝たのか……」

響が一言。

「さっきから何言ってるんだよ!？」

「さっきから何言ってるの!？」

二人一緒に言った。

その時から俺たちは、普通に会話くらいはできるようになっていた。
喧嘩ばかりだけど……

「二見さん……」

クラスメイトの女の子が二見を呼ぶ。

「何?どしたの?」

「あそこにいる先輩が呼んでたよ。」

3年の森本先輩……

二見に用事?

空はぼけーっとその様子を見ていた。

「ありゃ、告白だな……」

響が前に座る。

「さすが二見さん。
もう何人目だろう…」

「そんなにきてんのか？」

「俺のデータだと、森本先輩で8人目だ。」
「へえ…あいつモテてるなあ!!」

「あつ帰ってきた。」
空の隣に座る。

「ふう…」

「告られた？」
空が聞いてみた。

「まあね…」

（余裕そうな顔がいらつく!!）

「おまえかなりモテてるなあ？」

「そう？普通じゃない？」
（我慢だ…我慢だ俺…）

「おまえのどこがいいんだろうな!？」
皮肉を込めて言い放つ。

「あんたには一生わかんないわよ!!」

「まあまあ!!」

始まりそうだったので響が止めに入る。

放課後

「空、部活行くぞ!!」

響が呼ぶ。

「今行く。」

「ちょっと待って!!」

二見に呼び止められる。

「なんだよ?」

「部室行くんでしょ?

私も行くから待って!!」

「なんでおまえを待たないと行けないんだよ…」

「私一人で歩いてると、男子に捕まって告白されんの…だからあんたたちといればすんなり行けると思って。」

「なんかイラッとするけどしかたねえ…行くぞ!」

二見を連れて歩く…

男子の視線が恐ろしいものだった…

「なあ…空？」

部活姿になり、体育館でバツシュを履いてるとき、響が呼んだ。

「なんだ？」

「最近、バスケ部見に来る奴多いよな…？」

たしかに現時点で数名見学に来ている。

「目的は部活じゃなくて、あいつだろ…！」
指差す先には二見…

「やっぱりか…」

バスケやってるときの二見さんかわいいもんな…！」

「おまえ、マジに美月に殺されるぞ…！」

「おまえはかわいいと思ったことねえの？」

「……ねえよ。」

そのとき、二見の無邪気な寝顔が頭を過ぎる。

「誰が彼女を射止めんのかな？」

「知るか…！部活やんぞ…！」

女バスに注目が集まる隣のコートで、練習に励む空たちだった。

部活終了後、空は一人で遅くまでシュート練習をし、終わった時、辺りは真っ暗だった。

「ああ疲れた……
とつとと帰ろう。」

同時刻、体育館裏

「こんな時間に何の用ですか……先輩？」
そこにいたのは二見と森本先輩。

「二見ちゃん、やっぱり俺君が好きなんだ。
付き合ってくれないか？」

「その話はお断りしたはずですよ。ごめんなさい。」
二見は帰ろうとする。

ガシッ！

森本先輩に腕を掴まれる。

「そう言わずに、付き合ってくれよ……！」

「放してください……！」
手を振り払う。

「ひどいなあ…二見ちゃん。そんな態度だと、傷つくなあ。」
森本先輩が不気味にニヤつく。

「いや、来ないでよ!!」

壁に挟まれ二見は逃げられない。

「逃げられないよ!!」

森本先輩はじりじり追い込む。

「いや、誰か助けて!!」

「エヘヘヘ!!」

森本が二見に触れようとしたときだった。

ガシッ!!

誰かが森本の肩を掴む。

「何してんだよ!!」

「お、おまえは!!」

二見はそこで意識を失った。

ジリリリリ!!

ガバツ！

二見が目を覚ますと、部屋のベットにいた。

「あれ？私昨日、先輩に襲われそうになって…
思い出せない。」

ガラツ！！

「おっ！今日は珍しく起きたのか？」
向こうから空が顔を出す。

「芹沢：昨日私どうしたの？」
なぜか芹沢に聞いてしまった。

「はっ？何の話してんだ？」

そうよね…

芹沢が知ってる訳無いか。
何考えてんのよ、私。

「なんでもない。」

キンコーンカーンコーン

「おはよー！！」

二見が登校。

「おはよー二見さん。

ねえ…昨日の話聞いた？」

クラスの女子が話している。

「話って？」

「森本先輩のこと。

昨日の夜、後輩の女子に襲い掛かろうとして失敗したらしいよ。」

「その話…」

「なんでも襲い掛かる直前に誰かに捕まっただって…」

！！！！

二見が反応する。

「誰？誰が捕まえたの？」

「それがわかんないんだって。

あんな遅い時間に学校にいた人いるのかなあ？」

二見は急いで響のところに行った。

「ねえ響君！

昨日部活の後、残ってた人いる？」

「部活後…？」

それなら空だろ。あいつ遅くまでシューティングしてたらしいし…」

「えっ！？芹沢…」

朝は何も言っていなかったのに。

ガラッ

「おはよー!!」

空が元気に登校。

ドキッ!!

二見は空を見た瞬間、緊張が走る。

何：今の？

胸がドキドキしてる。

ありえない!!

空の平凡な日々。

二つの事件を経て、なにかが変わり始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920i/>

心バラード

2010年10月22日14時43分発行